

19. 神 謡¹⁾

雀の酒盛り

sakehe: han cikiki²⁾

折り返し: ハン チキキ

平村つる 1959年4月5日録音

han cikiki		1	ハン チキキ
pu tapka ³⁾ ta	h-	2	私は倉のおどりばで
terkeas terkeas ⁴⁾ .	h-	3	ピョンピョンとび
pu oro cóahun.	h-	4	倉に入り
5 sine amampus	h-	5	1本のヒエの穂を
cipuykare.	h-	6	抜き出し
sakehe cika.	h-	7	酒を造りました.
kamuy e rusuy pe	h-	8	神の好物
[u]sóne kusu	h-	9	ですから

1) この作品は、神謡 (kamuy-yukar, kamuyukar, 二風谷では menokoyukar) と呼ばれているジャンルのもので、習慣的な言い方で題をつけるならば, amamecikappon kamuy yayeyukar kamuyukar 《雀の神が自叙した神謡》というところであるが、歌い手のつるさんは、このとき、“han cikiki uwepeker (ハンチキキの昔謡) を言う”と言った。uwepeker は、ふつうは民話をさす(『アイヌ語音声資料 1, 2』参照)が、伝承されている物語という意味で uwepeker と呼んだのであろう。

2) han は、鳥の神謡の折り返しの項によく出て来る(たとえば han tori han cikap 『アイヌ語音声資料 4』 5. Upopo (2)). cikiki は雀のなき声の擬音であらう。

3) tapka は、「肩状に張り出した所の上」。昔のアイヌの pu (倉庫) は、ちょうど登呂遺跡のなど倉と同じ形で、4本の柱の上ののっている。1本棒のはしご段をのぼると、倉の入口の外、つまり倉の本体と下から支える柱との間に、おどりばのような縁側状の部分がある(その裏の、柱のつけ根にねずみがえしがついている)。その部分を pu tapka という。

4) つるさんのこの神謡では、主人公の神が自叙するのに、古形を保って1人称複数形が使われている。

tuto reto	h-	10	二, 三日
síran ki kor ¹⁾	h-	11	たちますと
sakehe pirka.	h-	12	酒は上等にできあがりました.
kamuy opitta	h-	13	神々をみんな
5 aske cúyna.	h-	14	招待しました.
kamuy utarpa	h-	15	位の高い神々が
uwesopki na.	h-	16	ずらりと並びました.
kamuy opitta	h-	17	神々がみんな
uwekarpa[n] na.	h-	18	集まりました.
10 tane anakne	h-	19	今や
iku noski or	h-	20	酒宴もたけなわに
cépare kor	h-	21	なったとき
eyami okkaypo	h-	22	カケスの若者が
tapkar tapkar ²⁾	h-	23	両手をひろげてタナカラを
15 ki rok ayne	h-	24	舞い舞いしてから
soyne akus	h-	25	外へ出ますと
sine nisewpo	h-	26	1粒のドングリを
ekupa kane	h-	27	くわえて
tapkar tapkar	h-	28	両手をひろげてタナカラを
20 ki rok ayne	h-	29	舞い舞いしてから
sansintoko ³⁾	h-	30	酒の入った行器に
oro omare.	h-	31	入れました.
kamuy opitta	h-	32	神々はみんな

1) ki は音節数を整えるために加えられたものである(『アイヌ語音声資料4』の「アイヌの歌謡について」を参照). この歌では1行が4~5音節(たまに6音節)に整えられている.

2) 「はしがき」の「内容について」を参照.

3) 酒宴のときに酒を供するために, 酒を満たして会場に置く行器.

ewminare.	h-	33	大笑いしました。
tap ki akus	h-	34	すると
paskur okaypo	h-	35	カラスの若者が
tapkar tapkar	h-	36	両手をひろげてタップカラを
5 ki rok ayne	h-	37	舞い舞いしてから
soyne akusu	h-	38	外へ出ますと
poro sí taktak	h-	39	大きな糞の塊を
ekupa kane	h-	40	くわえて
tapkar tapkar	h-	41	両手をひろげてタップカラを
10 ki rok ayne	h-	42	舞い舞いしてから
sansintoko oro omare.	h-	43	酒の入った行器に入れました。
ki akusu	h-	44	すると
kamuy opitta	h-	45	神々はみんな
iruska ki wa	h-	46	腹を立てて
15 weysakayo	h-	47	大げんかに
céosmare.	h-	48	なっていました。
ki ruwe ne kusu ¹⁾ ,		49	ですから、
tane oka utar,		50	今の人達は、
iteki paskur sinot ki no,		51	カラスみたいに悪ふざけをしない で、
20 iku osirepa pakno,		52	酒宴が終るまで、
ukoramuriten yak		53	なごやかに楽しみ
pirka! sekor,		54	なさいよ！ と、
cikappo ²⁾ kamuy hawean.		55	小鳥の神が言いました。

1) この行からふしなしの語りになる。

2) 同じ神謡の他の伝承では amamecikappo 《雀》と言っている。

〔類歌〕

この「雀の酒盛り」の神謡を、鳩沢ワテケさんが歌っているテープが、門別町教育委員会に保存されている [『沙流アイヌの歌謡』 No. 87 (10-1)]. NHK『アイヌ伝統音楽』No. 413 (pp. 464-467), ポーランドのピウスツキが80年前に録音して残した蠟管 [『国立民族学博物館研究報告別冊 5号』(pp. 217-221)] にも、この「雀の酒盛り」の神謡が入っている。金田一京助『ユーカラの研究一』(pp. 149-155) にも、原文対訳の筆録1篇が収められている。

これらの伝承では、カラスが殺されそうになったあと、キツツキその他の鳥に、仲裁を頼みに行く話が続く。鳥がかわると折り返しもかわる。頼まれた鳥は、招待してくれなかったからと、怒ってだれも来てくれず、しかたなく帰ってみると、カラスはもう殺されていた、という話になっている。

上記の伝承の中では金田一のものが最も長く詳しく、仲裁を頼まれる鳥も、ツル、キツツキ、シギと変わっていく。新しい記録ではだんだん話が短く簡単になり、つるさんのこの伝承では、仲裁を頼んで断わられる部分が完全になくなっている。